

The Camel's Nose

ラクダの鼻

ある寒い冬の夜の事です。砂漠でラクダ使いが野宿をしていました。ちょうど、ねる準備をしています。テントの中では、小さな炭の炎が辺りを暖めていました。

「全く寒い夜だ。」ラクダ使いが言いました。「暖かいテントの中にいれて、うれしいわい。ねる前に、火が消えて寒くならないように、炭をかき回しておくとするか。」

その一方、外ではラクダの1頭がぼやき始めました。「何てこった。外は何て寒いんだろう。」

グスングスン。



「鼻が、鼻が。こおりそうだよ！ おれたちの主人ときたら、テントの中でぽっかぽかだぜ！ せめて鼻の先だけでも、テントの中に入れられたらなあ…いい気持ちだろうなあ。」

そうだ！ テントのこいらを、ちょっとだけ歯でかじって、穴を開けてやろう。そしたら、中に鼻を入れて暖められるぞ。」

ビリッ！

「今のは何だ？」ラクダ使いがぎょっとしました。「何かがわしのテントを破ったような音だったが！

何ということだ！ わしのテントにラクダが鼻をつっこんでいるとは！」

ラクダ使いは、飛び起きて まくらをつかみました。「鼻を どけろ！」ラクダ使いは さけびながら、まくらでラクダの鼻を はたきました。「さっさと鼻を ひっこめるんだ！ 何という 動物なんだ！」



「ああ、お願いですから、ご主人様！」ラクダが 泣き声をあげました。「ウェ〜ンウェ〜ン！ どうか、わたしを たたかないでくださいまし。お願いします！ 外は とても 寒くて、鼻が ごこえそうなんです！ せめて、鼻だけでも 暖めさせてくださいまし。鼻だけなら、おじやまには なりませんでしように。お願いします。」

ラクダ使いは 腹を立てながらも、まくらをつかんで腕を下げました。「おまえは 何てことをしてくれたんだ！」

ラクダ使いがおこって 言いました。「わしの テントに 穴を開けるとは！ 直すのは 大変なんだぞ。」

確かに、外が 寒いのは 事実だが…。」

ラクダ使いは、ちょっと 考えました。「仕方ない。鼻を 暖めるが よかろう。だが、鼻だけだぞ！」

そう 決まると、主人は また ふとんに もぐりこみました。

けれども、身勝手なラクダは こりていません。「何て 気持ちいいんだらう。もう 鼻が 暖まってきたぞ。だけど、耳が 冷たいなあ。頭も 暖めないと。」

ビリッ！ ビリッ！

ラクダ使いがまくらを手に持って、飛び起きました。「何てこった！ 信じられん！ ラクダが テントの 中に 頭まで 入ってるなんて！」

こら！ この 動物めが！ 出てけ、出てけ、頭を ひっこめろ！」ラクダ使いは さけびながら、まくらでラクダを はたきました。

けれども、ラクダは 動きません。「やめてください、ご主人様！ お願いですから、たたかないでください！ 出てけなんて 言わないでくださいよ。」ラクダは しきりに 願いました。「ご主人様は、外が どんなに 寒いか、ご存じないのですよ。体中に 霜が 張り始めて、それは もう、ブルブルなんです。耳まで 冷え冷えですよ！ 頭だけ 暖まらせてくださいまし。頭だけで いいですから。こんなに 寒い 夜に、無理な 要求でしょうか？」

主人は 自分のラクダを見て、ふびんに 思いました。「ふむ、それなら 頭だけだぞ。そして、静かに してくれ！ わしは ねむりたいのだ！」

そう 言うと、ラクダ使いは ふとんに もぐりこみました。

ビリッ！ ビリッ！ ビリッ！

「もう、うんざりだ！」ラクダ使いは、またもや ふとんから飛び出しました。「いいかげんに してくれ！ 今度こそは、追い出すぞ！」

「こりゃ、何だ！」ラクダが テントに したことを 見て、ラクダ使いは さげびました。「何て 大きな 穴なんだ！ それに、ラクダが 半分も 中に 入ってるなんて！ 出てけ！ 出てけ！」

バシッ！ バシッ！ バシッ！

「ああ、ご主人様！」ラクダは こい願ひ続けました。「ご主人様は、親切で 心の 広い お方です。ご主人様の 恵み深き もてなしも、すばらしくて 言いつくせないほどです。外は いてつくような 寒さですが、ご主人様の テントの 中は ほかほかです。どうか、体の 半分だけ 暖めさせてくださいまし。少し 暖まれば、出て行きますから。そして、もう じゃまは いたしませんから。」

(何て ことだ。一体 この 動物を、どうしてくれようか？) ラクダ使いは 考えました。(ふむ、破れてしまった ものは 仕方があるまい。暖まるまで 少しの間、いさせてやるか。その後 出て行くと 約束したし。どっちみち、もう テントに入ってしまったから、もう これ以上は 破れることも なかる

う。)
「暖まるまで いていいが、その後は 出て行くだぞ！」そう 言うと、ラクダ使いは もう1度、自分の ふとんに もぐりこみました。

(ラクダの せいで、一晩中 ねむれや しない！ 今から ぐっすり ねないと。)

「ふわあ〜。」ラクダ使いは あくびを しながら、毛布を たぐり寄せました。

ところが、ラクダは ぶつぶつ 独り言を 言い続けています。「ああ、おしりが いてつくようだ！」

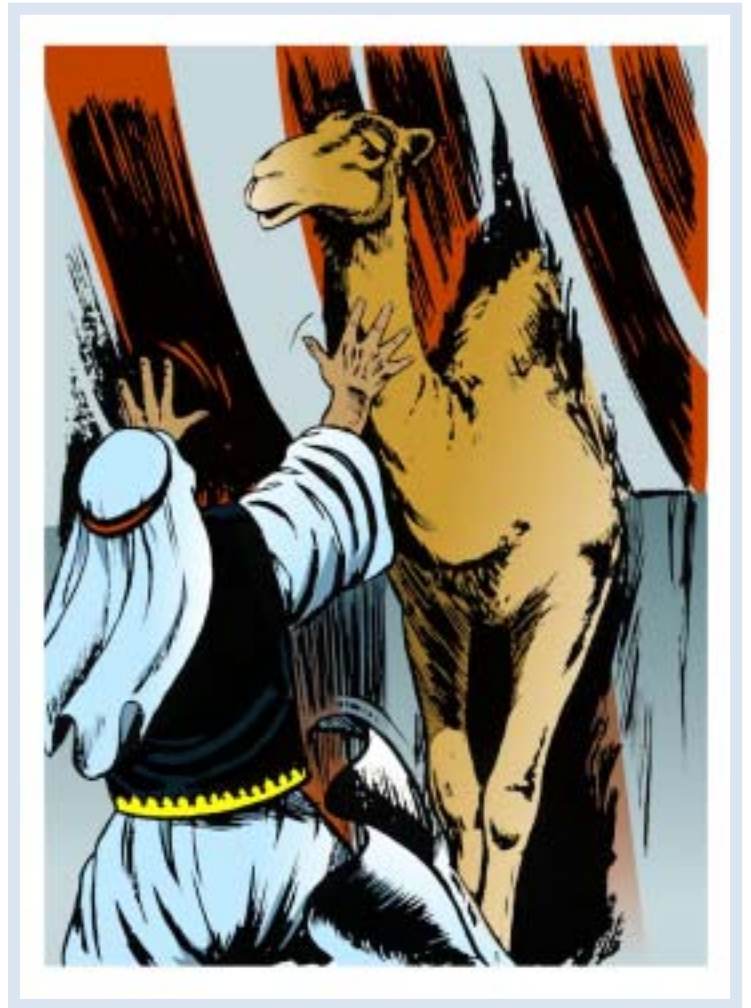
ビリッ！ ビリッ！ ビリッ！ ビリッ！

ラクダが テントの 上から 下までを 裂くと、テント全体が ゆれ、たおれそうになりました。

「何だ？！ 何だ？！ 何が 起きているんだ？」ラクダ使いは 大声で さげぶと、またまた ふとんから 飛び起きました。「大変だあ！ ラクダが 完全に テントの 中に 入ってるじゃ ないか！」

その時です。その 破れた ところから、群れの 残りの ラクダが 全部、どこどかとおし入ってきたのです！

「おい、この 大きな 穴を 見ろよ！ 主人の 暖かい テントの 中に 直結だぜ！」ほかの ラクダが 声高に 言いました。



「うわあい！」別のラクダも声をあげました。「中はすっごく暖かいぞ。」

「おい！おすなよ！」

「オレが先だ！みんな1度には入れないぞ！」

「あう～！」

「何てことだ！」ラクダ使いがさげびました。「助けてくれ！やめろ！止まれ！出て行け！出てけ！」

大変だ、速くここを出ないと、わしのほうがラクダたちにふみつぶされてしまう！」ラクダ使いはテントがラクダでいっぱいになる直前に、ねまきのまま、やっとのことで外の寒い中へ逃げ出しました。



「おお、外は何と寒いことか！」ラクダ使いはさげびました。「あのラクダが、まだ鼻先だけをテントの中に入れていた時に止めていればよかった。そうすれば、わしはまだ自分の暖かいテントの中にいることができたのに。」

主人のテントの中に入って来たラクダは、悪い習慣の始まりや、悪い行いをゆるしてしまうようなことにたえられます。あなたには、自分の人生の「テント」に入るのを止めなければいけない「ラクダ」がいますか？

このお話のオーディオ・ドラマ版は [こちら](#) (英語)。歌になった楽しいアニメは [こちら](#) (英語)。

作者：不明 再話：ポール・ウィリアムス 絵：ゼブ

Copyright © 2011 年、ファミリーインターナショナル

"The Camel's Nose"--Japanese